

## 御恩

若い人は賢くなろうとばかり考える。無理のないことである。

御恩を知ると言うようなことは、古臭いことだと思う。しかしそれは大変な間違いである。

恩を知らぬ者は必ず狭い世界に生活し、恩を知る人は豊らかな広い世界に呼吸する。

小賢しくて恩を忘れる者は、悪事を働き、やがて身の破滅となる。

愚かであつても恩を知る者は、その歩み忠実であつて、必ず世間に尊重せられ、人に愛せらる。

恩に酬ゆるに、恨みをもつてし、私情をもつてするを反逆と言う。反逆者は反逆者を友とし、反逆の理由を恩人の欠点の上に求めて、己を省みず。その己を知らざることだけでも既に、自ら墓穴を掘るものである。

貪欲は、物の御恩を知らず。

欲に二つの型がある。いわゆる、吝嗇型りんしやくの人と、無欲型の人である。爪に火を点すようなやり方をして、財産を積むことを楽しむ人と、金を湯水のように使う放蕩息子や、金持の坊ちやん等である。後者はあたかも無欲に似たれども、金を享樂や、名利と換えたのである。しかして恩を知らぬことは同一である。

恩を知らぬ者は、必ず貴る。

義務で動いても生きてはいない。権利で動いても生きてはいない。名利、貪欲の動きに、人を動かす力はない。人はただ底なきものに輝く人の言動にのみ感動する。

恩を知る者は、必ず輝く。

光明団に反対せんが為に、色々と策をめぐらす人がある。そしてそれを心配する人がある。しかし真に恐るべきものがあるとすれば、それはただ、真実なるものの動きである。二三の人が集る。その中に流れる空気が、怒りや、反逆心や、名利心等々であつて、純粹無雑な、念仏の心でなく、報恩行でなく、感謝歓喜の営みでない限り、未通るものではない。安心して差支へがない。

ただ我等の一切の動きをして、念仏に立脚せしめよ。感恩に根ざさしめよ。一切の動きのそれでないことを誡めよ。恐れよ。

悪魔は、反逆忘恩の心にひそむ。

如来に救われるとは、如来の底なき大慈悲を領解することである。

大慈悲を領解するとは、無限の恩に覚めることである。

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨を砕きても謝すべし。」

一句の法文に恩を知り、一行の聖語に恩を知り、無限の恩に覚むべし。しかしてこの和讃をしてその生活の全てたらしめよ。

恩を説くことは易く、恩にさめ、恩に生きることは難しい。

恩を忘れて、仏教を弄ぶ者は、学んで遂に仏法の底を知らず、かえって仏罰をこうむって、邪見我慢の種とならん。邪見我慢は、恒沙の諸仏菩薩を裏切り、その護念證誠を失い、不知不識の間に、悪魔悪知識に近寄り、流転の身となるであろう。

**念仏申せ。肩に微塵の荷物もなくなるまで念仏申せ。**

**念仏申せ。富士の山より重い荷物の肩にあるまで念仏申せ。**

恩に生きる者は輝き、恩を知らざる者は濁る。

恩を知る者は歡喜し感謝して光り、恩を知らざる者は、灰色に曇る。

恩を知る者は満される。満されるが故に報謝す。

たとえその両肩に重きを荷負いて、千里の遠きに足を運ぶも猶足れりとせず、しかも念々に満ち足りて、不足を知らぬところに恩を知る者の報謝の生活がある。

信心は、如来の真実によつて満され、満されたるが故に、澆刺として如来の御心に生きる知恩報徳の生活となる。

歡喜必ずしも信心ではないが、信心は必ず歡喜である。

恩を知る心は、その独りゐるに謹み、微笑し、輝き生きる。

恩を忘るゝ貪欲は、必ず人を欺き、その独りゐるに乱る。

恩を知る弟子は、その師をして安心せしめ、恩を知る子は、その親をして喜ばしむ。師を安ぜしむる弟子にして、師を超えて大成し、親をして喜ばしむる子にして、人生の公道を歩む。千里の遠きにあつて、師を思い、親を忘れざる子に、墮落なし。

恩を知らざる者は、慚愧を知らず。慚愧を知らぬ者は、恩を知らず。無漸無愧と忘<sup>2</sup>恩とは、表裏一体である。

無慚愧とは、面の皮千枚張りとなれる者のことである。面の皮千枚張りとは、何ももの心にひゞかず、おどろかず、鈍感なること泥の如くなれる心である。

かるが故に、無漸無愧を畜生とよばれる。

己を見るに敏感なること明鏡に物を映すが如く、真実に通ふ心の聡きこと寒暖計の如し。

自己に徹することは、即ち一切衆生の運命に徹することであり、如来の真実に徹することは、その恩に徹することである。

愚禿と名告りたもうは、己を知り、無明を知り、一切衆生を知りたもうが故であり、「慶哉」と嘆じたもうは、如来久遠の大悲に感じたもうこと敏なるがためである。

一切の虚偽無明に感ずること敏感にして、猶、悲観せず、厭世せず、歡喜の一道を歩みたもうは、如来久遠の真実に通じたもうが故である。

猫は甘え貪ることを知つて恩を知らず。己を知らず、土足のまゝ家に上つて、頭を下げず。

真に己を知らず、恩を知らず。頭の下らぬ者を猫と言うべし。

土足のまゝ家に住み、寺に居ること幾十年、人生の真の相を知らず、歡びを知らず、悲しみを知らず、道なく、光なく、意味なく、価値なし。何ぞ如来を知らん。

我慢強き者は、恩を觀ぜず、人の苦痛を知らず、他の悪に敏感なれども、他の善を見ず、他の悪を知るに似て、唯己の我慢を人の上に見るのみ。しかも我慢我慢を知ら

ず。我慢、我慢を知れば、必ず真実の前に頭をたれる。真実その骨髄を貫くことなれば、我慢を我慢と知ることなし。

恩を知る者は、内に開眼せられたるものである。内に限開くが故に、己の悪を知る。内に歩むことによつて、人は畜生より遠ざかる。

名利によつて動く者は、鹿を追う猟師の山を見ざるが如し。足の踏む所、手の動く処を見ざるが故に、名利却つて成就せず。一貫の歩みなきが故に。

恩を知る者は必ず、一貫の歩みを成就す。巖上の老松は人必ずこれを仰ぐ。一貫の操守老松の如き人のみ大成す。恩の行者は必ず一貫す。

聖人、万世に輝くは、如来大悲の恩徳に一貫するが故であり、偉人、忠臣、孝子の長く人を感動せしめ、鬼神を泣かしむるは、恩に生きぬくが為である。

**恩を知り、恩に生きるものは、世の光である。自然の道の行者である。**

人の子よ。必ず我慢、貪欲、無漸無愧、恩を忘るるをもつて最大の恥とせよ。

恩を知る者は帰る。

恩を知らざる者は、遠く輪廻する。

帰る者は、多くの善友と共に親の懐にあり、その慈悲の摂取の中にあり。輪廻する者は、悪知識と共にあり。念い八億四千の波と乱れて統一せず。やがてより深き暗のみ待つであろう。人の子よ恩に生きよ。